

456 河内附近の風景

# 徹夜行軍七〇里

歩四五五、所 歩兵軍曹 久保園茂

部隊は徹夜を以て一路南京に向かいました

疲れ切った身体に鞭あたる部隊長殿の聲が 秋空に

響き渡ります 嵐山より數百里—— 風の如き進

軍によつて 目指す南京は後七十里です

昨夜のクリークの水で炊いた黄色い朝食を終へて

附道で唯の十五分間を利用して横になりました

戦友達が 大地を母の懐と静かに眠る姿は 一寸内

地では見る事の出来ぬ情景です 猛進軍に馬も疲

れたのでせう 曳綱を放しても逃げやうともしませ

ん 代に居眠りを繰り返す位が関の山—— 人も馬

も疲れ切つておます

過勞すると語る者も居ない 煙草のマツチするの

へ一苦勞です。近頃煙草の煙が立ちぬを見  
た事が無い程煙草が欠乏しておます

一本の煙草も二人で分けてのみ、といふ  
歌があります。現在では一本あれば十人  
がべロづ、喰ひ廻す有様であります

兵は馬が落伍したら大変と、馬には充分の  
水を與へ、出發準備の聲と同時に立ち上り

ます。數方の靴鎖に踏み散された大地は砂  
塵と成つて吹き上り、長蛇の行列は又

今日も目を追つて行きます。昨日も今日も  
矢張り鋭い風景です。軍具が肩に喰ひこむ

、足には親指程の大きな豆が出来るおま  
す

宛垂に荒された部落が焼け落ちて、黒い残  
骸をざらして憐れと思へば、傍には無名の

草花が一輪咲いておます

黄昏の太陽に背蕨が重たい

この世の事でへはばる奴があるか

と叱咤される小隊長殿も矢張り疲れ切つて  
おられます

大休止二時間の声が待遠しい

晩秋の斜陽をうりて、閃めく鏡の光が瞳に  
まぶしい。歩き乍ら眠つておる者もある

待望の、大休止の聲は袂空に響く位元氣  
が宣い。鏡を下して先づ馬だ、充分には出

來ない前線であります。出來る限りの愛  
撫が始ります。脚をこするもの、水筒する

者、枱卓を集める者――今までの疲れを忘  
れてみんな愛馬の手入です。馬の愛撫が滑

むと今度は一日分の飯盒炊爨がフリークの  
ほとりで知られます

國も出る時は、飯を炊いたことのない戦友  
達も今は料理では誰にも負けないう腕の牙へ

方です。向ふの一軒家では、鶏と追ひ廻し  
ておる戦友もおます。明日への原動力は

大休止二時間ト依つて作られ行きます

雞の片足を片手にかじつてゐる者 小さい  
 青菜に岩塩つけて食べる者 早くも出発  
 準備を終へて その余裕に枯れた楊柳の下  
 に眠つてゐる樂しそうな戦友も見受けま  
 す 二時間の大林止は何時の間にか過ぎてしま  
 へ 又闇の中を行軍が始ります  
 藁に火をつけたまゝの篝火が狐火のやうに  
 赤く遠ざかるのが唯一の夜間標示でありま  
 した 夜が更けるにつれて腫魔は襲います  
 馬の尻に頭を打ちつけるのは平気で 前の  
 者の銃兜で イヤ、といふ程頭を打つて  
 目がさめる事幾度か知れません  
 休憩時間になると 晝間の汗が身に伝ひ渡  
 つて手も足も凍りそうぞ 思はず身震いし  
 ます 装具を枕に横になり 夜空を仰げば  
 満天の星—— いつもならあの星を眺めて  
 咲小闇の煙草も 今日完全に飲まして一っ  
 もありません 煙草といふ聲さへも聞か

い現在です 幻に想ひ浮べ乍ら眠る事が一  
 番賢明であります  
 夜間行軍二十里 曉です  
 軍衣も 銃も 人も馬も皆霜で真白になつ  
 てゐます 朝鏡りに吐く息が凍つて見へま  
 す 一面の霜の中の野茨の笑が赤く白つて  
 銃の頭に何とも言へない清々とした  
 南京へ南京へ…… 敵の首都南京へ希望の朝  
 です 爽やかな秋の大きを胸一杯吸へば  
 碧空に飛ぶ荒鷲、安……  
 今日も又戦いの行軍は續けられるのであり  
 ました  
 ◇ 急進や残り少き靴の鉄  
 ◇ 夜行軍明りぬ野茨白小丘  
 ◇ 大林止朝陽まぶしくパン啗る



歩四五、一二 歩兵伍長 日笠半治

杭州北岸に上陸した私達は快速部隊を予期して或る部落にて牛を徴發しました。擲弾筒手として負擔の重い私も牛の至りなつて糧秣を積んで行軍する事にしました。策の通り 部隊は一路南京へと快速の歩を進めました。

明りても暮れても強行軍で 夜眠つた事は殆んどなく 積々ニ時間位寢たのが関の山でした。愈々南京近くなると徹夜行軍です。ぬむい時寝られぬのも辛いものです。十分間の休憩に 膝を下すと同時に薪が聞えて来る筈でした。それでもぬまらず歩き乍ら眠つてゐる事が多かつた。

私も例の通り歩き乍ら眠つてゐました。夜明け前だつたと思ひます。石につまづいて「バツ」と目が覺めました。瞬間私が手綱を握つてゐる牛が何も積んでおません。良く見ると自分の牛でないらしい。(「あ困つた」) 部隊はどんく前進します。(今日は飯も食へないぞ) といふ田却が頭を閃きました。牛に今日の朝食を積んでおました。(どうしようか) ひよつと後を振り返つて見ると、自分の三三三間後から一頭の牛がコック／＼跟いて來ます。月の白い星明りの夜ではつきり判らない。良く見ると自分の荷を積んでゐます。今日私が握つてゐた手綱の牛は誰かに捨てたのか。部隊の中に這入つて來たらしい。眠つて歩き乍ら私は自分の牛とその手綱を何時握り変へたのか。暗夜の事で悪意識に握つてゐたらしい。

0389

377

有難い事は私の子が後から逃げもせず跟いて来てくれた事です。若し牛が途中で逃げてでも居たら其の日の飯も食へなかつたのです。夜が明けると思い切り受振してやつた事も覚えておます。

あの時はかりは眠かつた！

歩四五ノ三歩兵軍曹 段原道雄

南京も近くなつて武夜徹夜行軍と云ふ事になりました。上陸以來ハ難強軍で身体は綿の如く疲れ、強きは只氣力のみ、初めの間は「何くそ、此の位」と張り切るもの、次第に軍靴は重く、皮は破れて朱に染み、背囊は肩に喰ひこみ、胸は

壓せられる様を苦しむ、然し暗夜の入城を目捷に控へて意氣益々軒昂たるもので、愈々徹夜行軍となりました。五十分行軍で十分の休憩、といふ遺傳が来よ、最初の中は、軍靴の音も同じ様にしておました。が、段々夜が更けるにつれて軍靴の音もあすこにコック、こつちにコック、となり、或者は下水道に飛こむ、それを見て誰も何とも云はない、只下を向いて眠つて歩いてゐるものでありました。休憩十分の遺傳には嬉しいよりも有難いと思ひました。軒は高鳴る白川夜船、一瞬の夢を破るは出祭の声——

初めの話声も亦いつの間にか絶へて、又眠り行軍です。小隊長殿に備付いて行つておびたれ、前、背囊に鼻をキツツと言ふ程突きつけて気が付く、銃で頭を打たれて目をさます、と云つたやうな、突に眠たい行軍でした。

「小休止二十分」の聲には、何を待たせりも甚しかった。否有難かつた。然し私の隣りには馬が居て、時々足をパン／＼上げ、どうも危くて寝れませんが、そこで少し隊伍より離れた土手下に二十分間の憩をさす事にしました。

今迄の疲れですぐ眠ってしまった。かた／＼車の音、蹄の響、音隊が歩いて居る。長い部隊が通るやうに思つておました。(自分且)と思つてハッと起きると、誰もその辺には居ません。

今私は部隊が通る夢をみておるやうでした。馬の蹄、車の音、それは自分の部隊が通る時の音らしい。私は寝ておて独り取り残されて居たのでした。頭のもから足の先迄寒気に觸れた様な気がしました。

真暗い夜で方向は判断がつかない。道に耳を當て、聞いて見れば何の音もしない。

(よし、どうせへでも行け)と思つて一散走り、に走りまじらば、何処まで行つても部隊の音はしない。時計はなし。もう駄目だと思つて乍らもう一息と走つておくと、黒い人影が来ます。道寄つて来れば土氏が避難して家に帰る所らしい。それに聞いておきます。

「向小に行つた」と、今来た方向を指しておき、ではありますせんか。

あ、反対の方へ走つたやうだ。と気付いて二の句もつがず、今来た方へ走り出しました。

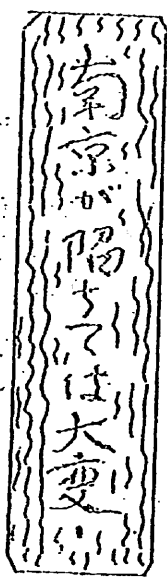
(此れを行くと必ず部隊に追付くのだ)と思つて約一時間走りましたが、未だ何も聞へません。所々に落ちておる鐵のやうな白い物を見て自分で勵まし、尚走り出すと、何の馬が落伍したと云つて、右左林想しておました。

「ううし、もう大丈夫だ」と思ふと、安心した。故か走る元氣もなくなりました。

中隊に着きました。も誰も何とも云ひません。

私も知らん顔して跟いて行きます 皆は相  
変らず眠るうに歩いておますが 私は眠い  
どころか目は一層冴えて来ました

朝になつて分隊の者に話したら 今隊長殿  
は何処へ行かれたんだらうか位にしか思つ  
ておませんでした」と  
じかし私は あの瞬間 覚悟を決めた命掛  
けであります



歩四五七七 笹原軍曹

南京攻略中は煙草の補給がつかず それか  
と云つて止められず 持つてゐる戦友のもの  
のを一口づつ喫ふ それも間もなくきれま  
した

砲兵隊の者に遭ひ 厚巻しく

煙草はよいですか

と聞けば

煙草倉庫から持つて来たのを持つて居る  
と云ふので 幾張つて貰いました

投じた爲河中に落ちたのを目掛けて飛び込  
んだ者もありました

四日間位ぞれぞれでたでせう

晝夜兼行で危く落伍しかつてゐるところ

前方からの話では 六師團の騎兵が既に南

京は攻略した」とのこと

思はず元氣を出して又前進 とうとう夜通

し歩いてしまひました

南京へ

見へない系に

引ばらぬ

眼を志水の妙安

歩四五 歩兵中尉 新里智昌

大隊で軍歌をほじめ 夜通し何處を歩いた  
かもし知らなかつた事もありました  
又歩きくたびれて 某軍曹が

「一ツ歩き乍ら各人大好物の食べ物の話で  
もしませうか」

と提案し みるな よかろう」といふ譯で  
やれボクもやれ やれテンプラビ 等々  
うすびものをあまひに想像しながら聞い  
自然疲れも忘れて行軍した事もありました



川急川行軍

歩四五 歩兵軍曹 四元侃一

戦地に来て肝に銘ずるものは 行軍の辛さで  
あります 幸して日本一の快速部隊の名を  
冠せられてみえます 賤くも若伍長か本  
来ません

中でも辛かつたのは南京に向ふ追索戦であ  
りました

昭和十二年十一月二十四日 桐嶺附近と  
快速部隊の一員として出発以来 毎日十里  
内外の道程を歩き通して 十二月一日廣徳  
に到着 翌日休養して三日廣徳出發

目指す南京城に一番乗り凱歌を揚げんも  
のと張切つておました



然るに河南店東方で陣の一部が敵と討峙中

との事、これに協力を命ぜられた

その夜、腹もせず、敵を撃破しました

惜むべきは、救済の戦死傷者を出した事で

すが、彼等を省みず、暇もなく亦急行軍であ

りました

昨日の朝から歩き續けて早や〇〇〇〇〇〇

皆フラフラになつておます

「オイ、顔色が悪いぞ、入院せよいかん

ぢやないか」

「馬鹿、南京に今一息といふ所まで入院出来

ると思ひか、回還に成つても南京迄は行

つて見せるぞ」

「どうだ、南京迄は死んでも行かぬや」

史の様な意気が全この悪条件を克服して

既に南京城の敵を呑んでおました

定準を〇〇〇〇出発、又強行軍が始められ

ました、照りつらる太陽が没すると、腫瘍

がハク／＼と頭をもちりて、あつた街道

の真中を歩いて、思はず道路からワリ

クに落ちそうになつて、戦友から注意され

る事が幾度もありました

「休め十分」の聲に皆どつと道端に倒れると

「早や高軒、」と「武光」は、と飛起きて反対

の方に歩き出す、寝床けた奴も居ました

足の裏一面を占領した、まぬが、飛上る怪

痛、出征以来の軍靴は破れて地下足袋と

履いてゐる者、まるでダンスでも踊つてお

るやうな格構で、飛上り飛上り歩いておま

す

私は此の時程「疾風枯葉を巻く」と言ふ

言葉と適切に感じた事はありません、目に

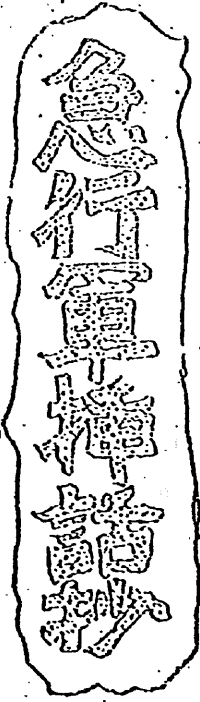
見えぬ、五感に感じない疾風がサーッ

と南京の方へ吹いて行く感じがありました

黙々と歩みに歩く部隊の中には燃える忠誠

の二拳で足の痛さも、眠りも忘れて涙ぐま

しい程の真剣さであります  
 とうく 腫瘍の儀程に付、使用意力が  
 私達を代表してクリークに痛び込む 十二  
 月の寒さ腫瘍解消剤クリークに痛びこんで  
 は眠さも一ぺんに覺めたのでせう  
 一日歩き續けて翌朝五六。漂水着  
 道端にゴロリと落ちて由つてしまひまし  
 た。夜が明けてみると霜が一杯自體に積ん  
 でおます  
 「二〇〇〇出発」誰かが叫んでおます  
 「早く米を採して朝食を食ひ、晝ノ食を準備  
 せんと寝る間がないぞ」  
 と皆に注意しておます



歩四五ノ一 淺田准尉 383

(一)  
 南京へ 南京への急行軍は全く大変でした  
 一番辛い日でも十二里位 大休止が一日に  
 僅かに時間、しかもその間に炊事をして飯  
 を食ふのですから、やつくり休むといふ暇  
 をとありませんでした

歩四五ノ二 松元軍曹

(二)  
 死んだやうになうて寝こんで吐き  
 ぞれを、さあ出発だ」と怒り起される  
 辛いこと、辛いこと、フウク、立ち上る  
 マメがチウク、痛む、痛む、肩がミリク、痛  
 む、習く歩く間はとても辛い  
 何しろ十二月三日からは、ろくに寝て居る  
 ないので眠い事とさつたらお話に行らぬ程で

〇

列を離れてフウくと反対の方へ歩き出す  
者もあつたり 土堤下やウリウリに落ちて  
む者もありました 案外けがもないもの  
です

歩四五ノ一 愛 伍長

(三)

連日の急行軍で軍靴だけでは足が痛んでや  
り切れません 土民の家に入つて草鞋や布  
切を重ねて 靴底にくくりつて歩く  
ホロ切を引きずつて ビツコして歩く 後等  
など まるで乞食とつくりです

然しそれでも 南京が最後の 頑張りを行  
かう 南京を陥せば後は凱旋だと しばか  
り 皆力んで歩いたものです

歩四五ノ一 笹原豊曹

(四)

米が無い 飯が無い 食ふものが無い

修草が繁い

下手に縦髪などに行かうものなら 置いと  
けぼりにされて仕舞ふ  
氣ばかりで歩いてゐるもの、いもじくてい  
もじくて仕方がないのです 私には後ではと  
うとう水筒の栓にしておいた 唐子で食べて  
てしまいましたが、それはとても美味しか  
つた



歩四五ノ一 赤星中尉

廣徳西方約十五料 河南店西方地区に於  
ける第十八師團の攻塵は、三日間も進捗  
せず 十二月三日晝から 我々第三大隊  
は応援に出ました  
山岳地の為 とても苦勞しました

一山を領してみると又山があるといふ有様  
左右をみれば友軍がすつと出て居る  
高飛びをして五十米も行くと、今度は何処  
から来るのか、全くの十字砲火を浴せられ  
て動きがとれない

後の方で砲撃の射手がやられる、  
小隊長殿危い、引き返して下さいと  
と部下がわめく

進むにも、引退すとも、十字砲火の中で據  
るべき格好の地物もない、全く閉口しまし  
たが、あの時は、どうしたはげみか二回轉  
びました、後の方では、小隊長殿がやられ  
た、と思つたそうです

### 濱田准尉

山岳戦であつた為、第一陸地を取ると敵  
が逃げます。

「それ今だ！ 追へ」

と言ふわけだ、援線を出ると最後、左右の  
山の敵から猛射をうけて犠牲者を出すとい  
ふ、実に嫌な戦斗でした

### 笹原軍曹

あの前夜の寒かつたこと

蒙など被つておましたが、寒くて寒くて  
ものも云へない位でした  
私は歩哨に立つておましたが、交代の兵を  
起しに行くのも嫌になつて、とうとう人の  
分まで立哨してしまひました

### 坂口軍曹

同じ河南店の戦つた時ですが、五十米お  
き位に友軍の保弾板があります

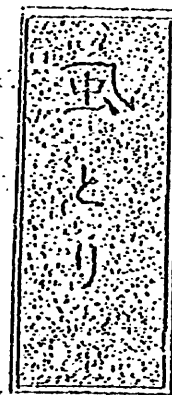
一体どうしたんだろう、十八師團の連中が  
着して行つたのだらうかと、疑いつつ前進  
しました、第二小隊の下川上等兵の誌によ

り 昨夜弁候に出た時 藤原少尉殿が 夜  
間標赤に使はれたらば といふ事が判りま  
した

### 山口軍曹

河南店の戦斗で上村上等兵が負傷しまし  
た。そして南京攻衆の三日前、その上村上  
等兵が戦死したといふ報がありました。  
小隊長殿以下黙禱を捧り、気毒なことをし  
たと。一同冥福を祈りました。  
愈々南京に入城。その日、戦死した者の上  
村上等兵がひまつこり帰つて来ました。  
小隊長殿が

「ほんとお前は上村か」  
と疑はれた位でした。  
戦友一同も暫時呆然とし、驚き且喜こんだ  
事がありました。



歩四五ノ班 下松曹長

河南店の戦斗の時、攻塵準備まで間がある  
といふので、凹地に這入つて七八名で風を  
取つておました。  
すると通りかゝられた山砲の大隊長殿が  
「なんだ、負傷者が馬鹿に多いと思つたら  
お前達は風を取つて居るのか、アハハハ」  
と笑つてお通りになりました。  
ものゝ三三分もした頃、敵銃砲聲  
が一際はげしく聞へました。  
今通られたばかりの大隊長殿は、重傷を負  
はれて下つて参られずした。

私共は云々知れぬ憤激を覺へて 間もなく  
此の敵を攻果致しました



歩四五二 久保軍曹

南京に前進する途中 アセレス腹を痛めて  
鞆紐で吊つて歩いておましたところ  
ヤンチュウで濕布すれば癒ふ  
と聞きましたので 部落に宿営しました時  
早速ヤンチュウの壺を探して来て 此の中  
に足を浸して癒みました

もう初冬に仲々冷たかつたが 我慢しまし  
た

翌朝起きに時には もう此の痛みはすつか  
り癒つてしまつて居ました  
今更乍らこの即効に驚き且感謝しつゝ元  
氣で前進を續ける事が出来ました

歩四五六 のぼひろ

大陸に傘を散りし戦友の爲

名もなき草を 手向りまつりて

歩四五 山本大尉

月みでは遊ぎにし戦友を思ふかな

故国に残りし 母の墓と子と



目次 野砲六

- |    |            |    |        |
|----|------------|----|--------|
| 1  | 南京へ 南京へ    | 四段 | 中村上等兵  |
| 2  | 斯くして 巨砲は飛ぶ | 二  | 久木山 單曹 |
| 3  | 周宗澤のこと     | 三  | 藤崎 單曹  |
| 4  | 支那酒で療す     | 一二 | 岩谷 單曹  |
| 5  | 装甲車隊の危難    | 三  | 瀬ノ口 准尉 |
| 6  | 水牛異變       | 六  | 石崎 中尉  |
| 7  | 拾つたカンメンボウ  | 一二 | 富徳一等兵  |
| 8  | 病馬を喰いて     | 四段 | 坂下 伍長  |
| 9  | 睡つて 部隊に遅れる | 一〇 | 柴立 單曹  |
| 10 | 隊長殺の神々しい後姿 | 一  | 福留 單曹  |
| 11 | 病馬と共に 急行軍  | 一〇 | 田中 伍長  |
| 12 | 糧秣を背負つて    | 一二 | 池田上等兵  |



野砲六 四段 中村明吉上等兵

十二年十一月下旬吾隊は 湖州南京間の坦々たる道路を急追傭中びした 道路の兩側には黄色く實つた稻か重く穂を垂れおます 要所に點在するトウチカは 蒋介石が首都防衛に構築したのでせう

此の附近の戦闘の激烈は 夥しい敵の遺棄死体が物語つておます 我が第一線は既に一週間も前に此の附近を占領したらしく 敵死体は青く膨れ上つた太鼓腹を 惜氣もなくむき出しておます 日に十五里もの強行軍です 中食の大休止に馬の手入れと飼付をして 兵隊が飯食ふ時間は僅か十分間位です 場所の選定等と

貧澤言つて居る暇もありません

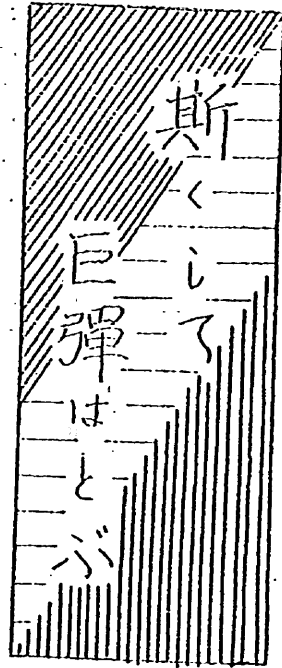
「戦争ぢやないか」

と言ひつゝ、臭氣芳々たる敵死体を横にポロ／＼の支那米の冷飯を 手早く掻き込みます

四五日してからでした 南京攻畧参加の爲め 隊の一部が先行することになりました 機道戦で押進んだ道路の兩側には 有力な敵が頑張つてゐるのです 戦砲隊に隨行するのですが 進行は更に激しくなることとせう 徵発馬で成る段列は 途中からの單獨行軍は凡々覺悟せねばなりません 武裝は砲手が持つ十挺位の騎銃のみです 堀川隊長殿が一同を集めて激励の後に「生きて再び會えないであらう」

と 訣別の御訓示されました 兵隊達は 日本男子の此の光榮に 感激の面を輝しながら 出發準備を急いでした





野砲六ノ二

砲兵軍曹 久木山治一

嘉興に二日の宿營を以て 人馬共に元氣を  
 伏後し 十一月二十三日中隊はチウノ、白  
 い霧が降る中を南京目指して進発し、また  
 二十四日湖川を前にして砲列を布き、また  
 太湖南岸唯一の要衝を誇る 蔣背水の陣は  
 流石にその抵抗も頑強にして 一線の魚雷  
 も進捗せし 午後に至ると戦況に變りあり  
 ません

何事か決意せられたりし藤井中隊長殿は  
 大隊長殿と共に砲列陣地に來られて 一  
 ケ小隊を以て陣地を推進す、殊に命ぜりし

直ちに挺身班を遣わして観測所へ先行せし  
 した 早速委馬通信三名と通信下士徳丸軍  
 曹の指揮に依り早速進線を始め 中隊長殿  
 の後に従へました 道路兩側に待期す  
 部隊の混雑は防げられずした やこさ大  
 をあげて開けられたらば作業をつくりし  
 出発す時観測所迄一五〇〇位も開き  
 いたので録を四巻揚行しつゝ かがて三  
 巻目も終り四巻目にかゝるも中隊長殿の足  
 は止まらぬ 湖川の城壁も後平米位を  
 う 敵陣は猛烈にとんで來す  
 隊長殿は五石を投げつけてあられたが 城壁  
 より百米程手前におき 軒京を見て  
 あそびだ  
 とさけはれるも 後小行けと澤丸の中を  
 二軒京目懸けて走りおこした 見れつゝ私  
 重もそれに續かんがまましたが 解け行く  
 残絲はあと僅かに二の位 軒京迄五  
 のはあま 何となく不覺に 余りの筆に  
 氣は皆日一様に呆然となり澤丸の中に全

く陣丸の中に立往生しました。通信下士の命に依り一應道路斜面に降りたが、何にても先ず補線です。頼む、急用と、声を背に私は一生懸命に走りまわった。

同じ合ふが、不安と焦燥で頭は一杯で、中で後方陣地に來てみれば、正に天裕中隊使用自轉車があります。思いがけずの援助で連絡を終えた時の喜びは、今だに忘れられません。

間もなく大迫准尉殿の卒した一ヶ小隊が、陣の中を觀測所に到着。砲聲到着の報告に、立つた中隊長は敢然と砲列布置を命ぜられました。

道路上空に距離計の糸、城壁の上に並ぶ掩蓋は、いきりに水を吐く。煙みかけた戦車も全部停止した。先頭には、小隊長と大連小隊長は前へ來、ヒ一聲道路上に駆け上られた。

見よ敵前三十米の攻撃の砲は、一發二発

掩蓋に命中、余りの見事さに行期としてみた。攻撃の大隊長中隊長トニおとりして敵声はあけられる。

噫、かし敵の十字火は、威烈を極め、小隊長

砲手と次々に倒された。

隊長殿、小隊長以下四名負傷しました。

悲壯な報告に、中隊長の顔には汗と沈痛

な色が表れました。暫く眼を閉じた隊

長が再度眼鏡を目にさし、さうい

一言叫べれると共に、後方陣地に射撃命令を

下された。依に塔の中、巨砲は片一ぱいから

掩蓋を吹き飛ばす。たゞり茶碗の敵は退却

します。

砲を失った突入する歩兵部隊、早や暮色た

つよう頂全く湖川城は陥落したのであります。

す。

今は亡き中隊長殿を偲ぶ時、湖川の状況が

思ひ出さず、佇りませぬ。



野砲六ノ三

藤崎 軍曹

湖洲の街に進入した自分達は 或大きな家まで分隊の宿舎に決めた

その家川主人は事変前は中國銀行の行員であったらしい事が その家にある巻物等から知

る事が出来た。事変前の生活を物語る豪華な調度品 ツツアー 寝台等がこゝでの私達の二三日の滞在を顧る格好なものにしてくれました

寢床の準備や 炊事の準備等も終つて、一久しバりに蒸籠に水れる 支那茶碗であるが飯も茶碗で食へる。とソクくす。満足感と味ひ乍ら アチコチと歩き廻つてみました

ふと見ると 裏木戸から通路があつて 隣の家につづいてあります 何となくほしに行つて扉を押すとたんとく開いて 鈍い光線に巧い家具等が見えました

中に進入する途端に人の気配を感じて ハツとして身縮へたり 注意して見廻すと 何と私の緊張した顔とは反対の 柔和な青白い青年の笑顔にふつかりました 彼はしきりに自分の兩足を指さしておます 注意して見ると 彼は満足利かたの不具者でありました

小馬鹿にいた彼の笑顔にいさゝか羨望をた

て、おれ私も或憐れみが起りました

父母はあつた

と聞けば

「ありませうが 皆南京へ逃げて行きました

と答へる 私の頭にはいさ／＼の事が奉へ

られまゝだ 此の者は不具者だから日本軍

は危害を加へないだらう」といふのが彼一

人を残して行つた両親の考へたのでせ

うか 善意に解いてそれ一つだけだす 悪

意にとれば 手足まじひになるからほつと

けり」といふ調子であつたかも知れない

とも考へられます 在んた事ですう 焼

野の雑子 夜の鶴等といふたとへもありません

す 不具の子ほど親は可愛いと云ふではあ

りませんか 私はこゝ迄考へて来て この

事が狂直を生んだ此の國で行はれた丈に無

情に腹立たしくなりました

こうした事から私達は彼と残飯をあたへ

親切に取扱つてやりました 彼も又私達に

なつて 焚火を回人で雑談に興ずる時

には 私達の笑顔を嬉しげにながめてゐる

彼の青い顔が一枚必ず加つてゐるのであり

ました

彼はよく物資のありさうを留所を私達に教

へてくれまゝだ 私達が珍らしいものを手

に入れて嬉喜したのは 多くは彼に負ふと

ころのものでした

私が外に出ようとすると 何處に行くか

と不安さうに聞く始末でした 自由を奪は

れてゐる彼にとつては孤獨になることが

たまらない不安であつたのでせう

私は彼と一緒に生活してゐる中に 彼の哀

れな境況が可愛損になり 用足しに行つて

もそこ／＼に彼のものと帰る標になつ

てしまひました

そして教日経つて出登する事に成りました

このこと勿論彼には話しませんでしたが私達の行動にその気配を感じて

どの方面に行くか、もう帰へつてこた  
いのか

等と聞いては行水もせん、私はいつもと愛  
らぬ 素振りと應待て出登の朝を迎へずし

た  
薄暗うちに彼も起出して、出登準備を整へ

る私の傍にしよう人ほりと立つてみました  
涙に潤んだ目は、私をうらんでおるか、椽

に感ぜられ、私は視線が合ふ度に懐く、目  
をそらしました

忙がしい素振で彼に無関心の椽に泣かす  
も、さて何と言つたものであらう、だま

つておれさうか、等と尋へてや、時々

の情景等想像して居りました

私は出登直前に手帖をとり出して次の椽に  
書きました

日本兵諸君 一片の憐情あらばこの不具  
者に危害を加ふることなく 庶幾くば一  
碗の飯を與み給へ 一皇軍兵士

と、それを回収つて彼に渡し

日本の兵隊が系たらこ小を見せるんだ、  
と言ひました、何のための紙片かわからぬ

違ふ、善意、何物かであるらしい紙片を手に  
して、一瞬感謝の色が動いた椽でありまし

た  
出登の時間が来ました

「ガヤ達着てな」  
彼には通せぬ日本語に力をこめ、肩を叩

て門をこぼれしきました  
握違つて見たら彼の片健康な青白い顔が

膝間の中に浮んでおまいた。彼の名は同宗  
澤しいハオした

支那酒で療す

野砲六ノ十二

砲兵軍曹

岩谷 喜三郎

湖川の風景を語へつ、清流を舐んだ。小  
さな部落に遷くつきました

竹藪のアチコチに巨大なトーチカが草に埋  
つておます

薪は一本もなく、天井の丸太も柱も一つも  
ありません。氷河に行つた兵隊が少ざな丸  
太一本かっいで来たので、それを小さく  
割つて、豚汁を作り、空腹をみたしてす

ぐさの疲れでぐっすりおてしまふました  
翌朝出発準備を整えて、昨夜水を汲んだ岸  
を見るに三米位上流の杭に青くふくれた土  
左と門がか、つておます。その水は四五日以  
前から同じ場所にある様子です  
美味いかつた昨夜の豚汁を思ひ出し、見合  
す。同の顔つたりありません。私に思ひく  
つた胸をなぞすため、鞆にあつたチヤン酒  
を一口グツと呑みました

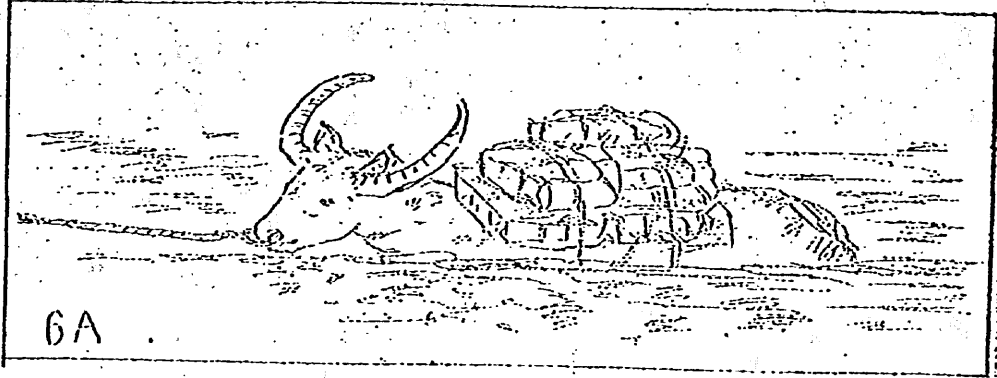
射要にはまだ向のありて

飯をはみ煙草を吸いて

心おろしく

和一

野砲六ノ三彈藥ヨリ



6A

# 湖州城外

## 裝甲車隊の危難

野砲六ノ三

砲兵准尉 瀬ノ口 享

昭和十二年十一月二十四日、岡崎支隊に配属になつた第一大隊は、湖州攻襲のため、〇七〇〇頃湖州東方約二軒の桑畑附近に

陣地を占領し、有効なる戦斗を交へて、日没に至りました。一六〇〇、次の大隊命令を受領しました。

岡崎支隊及第百四師團ハ、既ニ湖州ニ入城ス。湖州東端城壁ノ線ニアリシ敵ハ、極メテ頑強ニ抵抗ヲ續ケタルモ、装甲車隊並ニ我大隊ノ攻襲ニヨリ、遂ニ日没ヨリ退却ヲ開始セリ。大隊ハ現在地附近ニ

兵力ヲ集中シ 村暮露營セントス 大隊  
觀測掛ハ輕裝甲車ニ便乘シ 岡崎支隊ニ  
連絡スベシ」と

其処で當時大隊觀測掛であつた自分は早  
速裝甲車隊長藤田少佐殿に應じました所

「裝甲車隊は本夜全部入城す」と

とのことでした 時は既に薄暮です

藤田少佐殿は出祭に當り 部下に次の如く  
指示を與へられました

「湖州城壁には若手の敵が居るかも知れぬ  
然し堂々燈をつりて乗出したら 敵は退  
却するであらう」と

自分は裝甲車に乗る筈でありましたが 藤  
田少佐殿が乘用車に乗られて

「おい 一緒に行かう」と

と 心算く申されまので 自分は運轉助  
手台に乗り 少佐殿の當番兵と 他に兵一  
名も同乗さして頂きました

車内には 小鍋に夕飯の料理が準備されて  
クタクとたぎり 好い香がしてゐます  
やかて出祭命令に依り 裝甲車の間に 乘  
用車が何台も狭まられて 電光を輝かがし  
爆音をたて、堂々と入城しつゝした  
約十米ばかり城壁に沿ひ前進する頃は 太  
陽は西山に没し 辺りは暗闇に包まれてゐま  
した

先頭裝甲車の操縦手が

「あなたがこちらに来るぞ 乗てく」と

と叫びます

助手台から覗いて見ると 銃を持つた支那  
兵が一人 道路を左に横行してゐます  
先頭裝甲車が停止して射撃したので 左側  
の藪の中に姿を消しました と同時に  
高さ十米位の城壁から 敵の機関銃が数ヶ  
所ふり 又左側の藪からも一斉に 乘用車  
目懸けて射撃を開始しました



隊長殿の當番兵が

「やうれだッ」

と叫んだ。同時に乗用車の者は、各車共一人残り下車したが、自分は外套を着用し

其の上、器具を全部身につけておたぐめ早く下車が出来ません。然し下車しなれば危いと思つて、扉を固く閉めて、左方へ向く。栓らしきものに手をかけたが、どうしても、勝手が解らず閉まれません。運轉手の乗つてゐた方から降りようとすると、船棹が邪魔になり、却々降りられません。身邊には無数の弾丸が飛んで来て、チンカチヤン／＼と音がし、凄惨な燃焼の臭ひがします。自分は運轉台に、小さく曲り下り、どうなる事かと思ひました。裝甲車の機関銃手は、天蓋を開けて猛射を續けてゐる。そして口々に「早く段列の警言隊を呼べ、早くしなると

城壁から石油がかけられ、水でもつけられ、たら全滅だぞ」と叫ぶのでず。

これは、大変な事になった。

と思ひました。約十分もすると、乗用車は空車と知つてか、余り弾丸は末なくなりました。暫くして段列警言隊も到着する。敵はそれを知つて退却しました。下車した者も乗車して燈は消して、約七百米前進し、湖州車站に到着しました。

藤田少佐殿と乗用車を検査しますと、一台の自動車に、十二、三ヶ所、小指大の穴があいておりました。

側方より撃つた弾丸が一番よく命中して、自動車の中にあつた料理の小鍋は、轉り落り又積載してあつた、少佐殿の小形のトランクにも二発命中し、曲り／＼弾丸が出たらしく、禰祥等は、はう／＼に破れておまし

た  
其の晩國崎支隊本部へ 又明日の配属歩兵  
二十三聯隊二大隊長 河喜多少佐殿に連絡  
をとりました  
當時負傷者は重傷一 軽傷数名 藤田少佐  
殿も擦過傷に依り負傷されました 自分は  
御蔭で負傷しませんでした 疲労気持が  
しました 其の時の事は未だに忘れられま  
せん

# 水牛異變

野砲六ノ六

砲兵中尉 石崎重之

抗州湾上陸戦後 昆山を屠り 嘉興を陥  
し 一路南京への急進中のことでした  
初冬の朝の霜は厳しいもの、午さかりの

陽光 小春日を思はする一日 先遣部隊に  
追及中らしい 水牛を連れ二人の歩兵が  
ありました 見ればその水牛には十数個の  
背嚢 その他多数の風呂敷包が ぐる  
ぐる巻きに積んであります  
連日の急進襲に 兵も牛も相當疲労して  
ぬるらしい様子でしたが やがて其の一行  
が 小さな汚い溜池の横まで来ると 牛が  
ひたりと止つてしまふました  
手綱を執つてゐた兵が しきりに鞭打ます  
が頑として動かず その汚い溜池を凝視し  
て居た例の水牛は 突然溜池の真只中に猛  
進 びり水溜に出して けろりとしてみま  
す  
二人の兵隊があはてたことば言ふまでもあ  
りませぬ  
貴様 何ぼやつとしとつたのか 水牛の  
耳の葉が熱うなつたら 水につけんとい  
かんちやこた 俺が今朝から言ひよつた

ろび

「済まん / あんまりだしめけて 俺

も呑喰ふた」

「困ったぬー！ 小隊長殿の荷物も積んどつ

たがぬー」

行きすりに此の風景を見て 私も苦笑を禁

じ得ませんでした

二人の兵隊の其の後の処置は 見極めるこ

とは出来ませんでしたが 御想像に任せま

す

拾ったカインメンポ！

で元氣百倍

野砲六ノ十二

砲兵一隊兵 富徳 清

十字舖より午前二時出発して 一路南京に向  
いて部隊は前進してゐます

連日の急行軍で 心身共に疲れ果て、 睡

魔はヒシ／＼と迫る 歩いてゐるやら止

つてゐるのやり自分では判りない 馬の尻

に顔をつぶつて、ハツと気付く 此は

いけないと思つて 目を一生懸命に見開い

て 足に一步々々力を入れて歩いてゐるけ

れど 暫くするともう駄目だ 喉は何時か

間にか 上と下と仲良くなつて くつ付い

てゐます

出来る限り眠らなう様に 努めながら前進

するのですが 今更もう足の運ぶも機械的

です 望明りに黒く見えるのは部落らしい

あれ並行中は休憩かも知れぬ 腹が無性に

空いた あそこで水を飲もう など考へる

から行つて見ると なんだ小高い小ぢやな

いか かつかりすると一緒に 今迄押へて

来た腹の虫がグウ／＼不平を言ひ出した

道路に白いものがある 足でさわつて見

ると 何か食べられる物らしい 現金は物  
で この時は眠は別然痛んでみた 取二リ  
て見ると カンメンポトだ 夢中で一口口  
の中に投入しても がリツと一口かんだ時の  
味 子供の時お母さんに 無理矢理に一銭  
貰って 飴玉を買って食べた時の あゝ味  
を思ひ出しました

戦友にも分りてやり 今迄の眠さなど何処  
へやら 足どりもかるく 前進しました  
あの時の・カンメンポトの味は今だに舌に  
こびりついて忘れられずせん

野砲六ノ二

敵軍火に手紙讀む 兵氣壯しく 喜春  
病臥す 親心知る 古手紙 清香

# 病馬を曳いて

野砲六ノ聯段

砲兵伍長

坂下 清隆

十一月十七日上海に上陸した我等は 南京  
へと行軍を開始しました 行軍も幾日かを  
過し 十二月六日〇〇に着いた時 南京攻  
略に間に合ふより事で 自分等の小隊でも  
急追の命を受け 同日より晝夜々急行軍  
が始りました

七日の晝夜々り砲声を聞き始めたので 私  
共は一層元氣付きました 永の間急行  
軍に疲れた馬は日に日に病馬が多くな  
るばかりでした 八日自分達の車輓にも病  
馬が出て 自分と〇〇君二人は 其の病馬

曳きを命ぜられました

小隊はどん／＼進んで行きますが、病馬は  
唇か／＼赤きません。小隊とは増々は唇  
るばかりです。時には撲り、又押し、或は  
引張り、あせれば焦る程馬は赤きません  
そうして行く中に、早や日は暮れかゝり  
辺りを見渡しても人影も見えませんが  
砲声は近くに聞えるので、小隊も遠くには  
居ないだらうと思ひ、行けるところ迄行こ  
うと、又ほつ／＼歩き始めましたが、行け  
ど進めど附近には人声も聞えず、唯時々銃  
聲が聞へるばかりでした。  
ふと、時計を見ると一時過ぎておます。一  
休してみると、微かに人声が聞へます。友  
軍ではないかと耳を澄ませば支那語です。  
一寸先も見えぬ夜で、人影も見えませんが  
話し声は段々近くなつて来ます。  
これは確かに敵だ、もう自分最後だ、

と思つて居りますと、其の者等は三十米位  
前方を横切つて、話声も次第に遠ざかつて  
行きましたので、ほつと安心しました。  
私共は肉む馬を曳いて歩き始めましたが  
横から出て来そうではりません。恐る／＼  
歩いて行く中に、夜が明け始めましたので  
安心しました。其処で一休して昨日の残り  
の飯を食ひ、馬にも飼付をし、又出発しまし  
が、馬は増々疲労して、歩きななくなつてお  
ます。  
もう馬と一緒に死ぬうし  
と思ふたことが何回もありましたが、自分  
の気を強め、馬に気合を入れたつ、二里位  
来た時、とう／＼馬は倒れ、起すに越さぬ  
め状態と成つておきました。仕方なく最後の  
別れを馬に告げ、私共三人は小隊を追及し  
ました。  
その日の暮れ方、〇〇隊の輜重に出會ひ

その夜は輜重隊と同宿し 朝七時出発  
十六時頃本隊に追付いたその時は傍  
しさの余に泣きました

## 睡って部隊に遅れる

野砲六ノ十 柴立 軍曹

廣徳を通過してから 南京攻塵に間に合は  
ぬといふので 急行軍に移りました  
丁度南京迄七里位のところに着いた時は  
二十四時頃でした そこで小休止がありま  
したが 私は傍の土境にもたれてあますと  
連日の強行軍の疲れで 何時の間にかぐ  
つすり睡つておました  
目を覚ましてみると 部隊は出発してしま  
つて影も見えませんが 慌て、飛起きて追及  
しました 銃は分隊長殿に預けてありま  
したし あたりは真暗で 遠くで犬の遠吠

えが聞えて 心細い事と言つたらありませ  
ん  
え、ま、よ

と蒸度胸を決め 屋燈りにぼんやりと白く  
見える 道路を前選しました  
気がついて見ると足は小走りになっていま  
す  
誰かッ

と低いけ水と力強い聲で誰何これ 夢中で  
大聲で官性名を名乗りました そいつは何だ  
かぼつとした様な気持に居りました  
その歩兵の歩哨に部隊はどおれりところを  
行つてみるかと尋ねますと 十介程前通  
過したとの事 急いで行けば追付くことが  
出来ると思つて 半里程進ぶと 三叉路に  
自動車隊が居り 又歩哨線に引かゝり 部  
隊を崩さずと

二十介程前通過しましたか 此れから先  
は敗残兵がたくさんあるから 一人で  
行くのは危いですよ 夜が明けから追及し

なさい

と言つてくれましたが

「いや、そうしては居りません、これから退及し居りれば居りません」

と、周りに浮く黒い部落の影や、風の音に神經をたがぶらせて、一生懸命に前進しました

と此位歩いたでせう、前方に砲車の音を聞いた時の嬉しさと、必立つ思で急いで行く、と、左方の城壁の上で、村上少佐殿達が居られて、私のことを話してゐられます、その時正直に

「柴立は二、に居ります」

と言つて、事情を話して御説すればよかつた力ですが、何だか圓々しい様な気がして、そのまゝだまつて、部隊の後にくつゝ、いで前進してゐる中に

「柴立は二、に居ります」

と見つかつてしまふ

「足が痛くてあく水でした」

と嘘をついてしまひました、後で中隊長小隊長殿から

「足が痛いとて、獨断でかくれては、か人順を経て居けり」

と大目玉を頂戴しました

自分一人のため、隊長殿以下全員に御心配を掛けて、非常に御氣毒で、次でとあつたら、這入た、様な氣持でした

今でもその時のことを考へると冷汗が掛ります

# 隊長殿の神々しい

## 後次女

野砲六、一

砲兵軍曹 福富 正雄

「前車」 砲手六名は一生懸命でし

た  
汗を拭く暇もなく 架尾を擔ぐ者 車輪を  
繰る者 僅か六名の砲手で 暴露した大道  
路上の前進です

敵の火力は熾烈を極め 重機子エッコが盛  
人に耳を打つ 歩兵もこれより先には一人  
も出て居らぬらしい 後方には幾多の部隊  
が 地物の蔭に遮蔽してゐるのが見える

各砲手の顔は必死です 無我夢中です  
然し心はやたけにはや水ども 砲車の前進  
は遅々として進まず 牛の歩みにしか思は  
れませんでした

此の時戦場附近は 朝霧深く立ちこめてあ  
ましたが 突如 本道上に浮ぶ如く出現し  
た 大きな砲車の姿と 之を操る砲手のか  
たまりを察見した敵は 四方八方より 我  
砲車に向けて 集中射を浴せかけました  
「よし此水」

砲手は砲車を下すと同時に 射撃を開始し  
た 硝煙の中に動く各砲手の姿は 実に勇  
敢です

戦友同志の協同一致 ありゆる危険を前に  
志気益々旺盛 びつたり合致した心と心の  
融合の有難さに 感謝せざるを得ませんで  
した

照準口蓋を開けて見るところ 数條に亘る  
堅固なる敵の陣地 偽装せる掩蓋 散兵し  
て蠢動する敵兵 すべてが判然と見えま  
す

「シニル」  
断續的に射撃される敵砲弾が 唸を生じて  
頭上を飛び越して行く

「ガアーン」  
「そう来たぞ」  
戦友の顔は 土と汗に物凄く蒼白く光って  
見えます



「バラ」  
すぐ後の山に炸裂したらしく、土砂が鉄帽  
の上に落ちて来る。頭類、体を掠めて

「シユツ」  
と唸る気味悪い銃弾の音。砲弾の炸裂する

光音 土煙

「四〇五」

清田伍長殿が、自分で敵の掩蓋機銃座に  
架虎を移動してつけました

敵前二百米の道路の上にあつて、砲手六名は  
我を忘れて、射ちに射つた

「やう来たッ」

清田伍長殿が叫んだ。然し皆後を見ず、余裕  
さへ許さぬ。連続射だ

「アツ」 米田曹長殿と辻一等兵が

敵陣向きの洞にあつて、中隊長殿は銃筒も  
かたまりで、雙眼鏡を持って敵陣地を  
見入つてゐられる

正面の敵は、我々の射撃に依り、氣勢を  
くたやしたらしく、走りまわつたが、側  
方の火機は、未だ盛んに猛射を浴せる。然し砲  
煙陣向きのため敵重火機の存在が明らかであ  
りませぬ

「よし」 道下に入

中隊長の命令で我々は一應二尺ばかりの  
道下に入り、負傷者も止血を始めた

見れば鮮血にまみれて、息苦しさうにあ  
ぐく戦友の顔、皆は

「確りせよ」

と一人々々、側へよつてはりまゝです

中隊長殿は、こぼれたし、と獨り溜息をつ  
いて、負傷者の傷を我が事のごとく、次から  
次へと弾丸をくわつて廻られ

「衛生兵を呼んで来い」

と言はれたが、瞬く間に又喜屋武衛生兵が  
やられ、都合五名の負傷者が出ました

中隊長殿の顔には、実に残念そうなる。そして悲壯な表情が見受けられたが、一瞬の後

「よし、俺は他の砲車で側方をたいて来  
と、敵意としてた、れしました。皆は各々  
「自分が随って行きます」

と言ひました。然し中隊長殿は  
「危い、お前途は此處に居れ」

と後方を向いて膝を立てられました。見れば中隊長り長靴には、新しい藁草が一杯  
こぼりこぼりしてあります

「中隊長殿、翼が一杯ついておます」  
と安武軍曹殿が放へました

「それ、さつきから喪失臭がすると思つた」

と苦笑を  
「さう言へば安武、お前り長靴は」と

安武軍曹はぶっくり  
「アッ、しまった」  
と頭を仰へ、側の方をまわして早速一杯こ

げついた翼を落とし始めましたが、却つてあ  
うがるばかり。慌て、一生懸命おとされた  
が結果は面白からず、見てゐたもろ皆々の  
格好があまりにも滑稽だったので、顔を見  
合せて笑ひました

「この際仕方がないね、で、後を頼むよ」  
と翼もおとさ小ず、両ひ鉄帽をかぶり、

弾丸の中を横ざり、他の砲車を指揮して射  
撃すべくさがりれすした。平素おとす態  
度、貴公子の様な中隊長殿の沈著剛愎な態

度に、我々は涙の出る程たのもしく、力強  
く感心。遠ざかり行く中隊長のお姿が、輝  
く神の姿の様に見えました

今でも「此の際仕方がないよ」と言ふのを  
聞けば、當時のことかまざく、と脳裡を掠

めて感慨無量です。  
南京攻略の途次、十二月九日水口附近に於ける牛首山攻築は、我々の一生忘れることの出来ぬ、一つの印象として刻み込まれ、屢々想ひ出して苦笑せざるを得ずせん。

## 病馬と共に

### 急行軍

野砲六ノ十

田中伍長

二十三里晝夜行軍をした後、大休止が二時間半ありました。  
人も馬もへと／＼に疲れて、話すことさへあつくうでした。

さてその大休止間

「歴當番に立て、立つた者は明日砲車にのせよ」

と言つて来ましたが、誰もあまり喜ばずせん。

「よし俺が立つ」

と當番に立ましたが、墊床前自分の馬が元気がなくなりましたので、車長馬も代へ、第十一中隊の獣医殿に見てもらふため残りました。

馬の脚を冷し、十一中隊が来るのを待つてみました。連日の強行軍と、睡眠不足のためぐつすり寝込んでしまひました。

目を覚まして見ると夕方らしい。しまつた。十一中隊は行つてしまつたりしい。

早速馬を索いて前進せよめると、自動貨車が次々に疾走して来ますが、止めてくれ

ません ホツ／＼歩いてゐると十一中隊が後から来ました。が急行軍のことゝて診療等思ふもよりません 仕方があるので後尾に從つて行くけれど馬はなかく歩いてくません

ともすれば立止うとす馬を勵しながら翌日南京の近くで中隊の者に會つた時は今迄張切つてゐた気が持が一度にぐらく／＼すれてしまひました

## 糧秣を背負つて 晝夜の強行軍

野砲六ノ十二

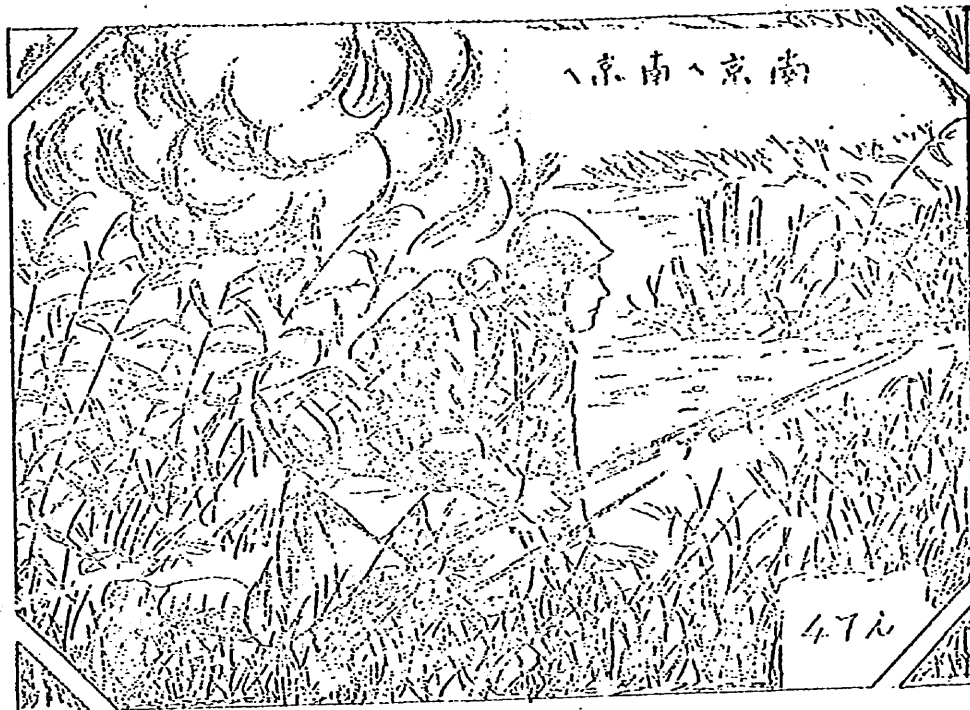
砲兵上等兵 池田銀次  
南京城も目睫に迫つた十二月五日 点呼の際に隊長殿から次の如き指示がありました

皆連日の行軍で疲れた事は萬々承知してゐるが、世界戦史に一頁を飾る、南京城攻畧戦に参加出来るのは、帝國軍人として此の上位の名譽と思ふ、この名譽ある戦斗に参加せんには、一番必要なる馬糧がなくてはならぬ、それでは、人馬糧を携行するに、車輛に馬糧を積み、砲車は各人糧秣を背負つて行け、

と、今迄の急行軍で疲れた切つてゐる自分達は

上陸以来の難路に苦しめられながら、此処迄来たのは吾人のためか、敵首都南京城攻畧に参加せんためだ、四日分のチヤン米位は人だ、早く南京に着いて敵陣を叩き潰さなくては……

と、勇気は益々湧きあがり、北背中の糧秣は吾人のその足よりも軽々と南京へと晝夜の強行軍を續けました



# 南京攻撃前のコレラ

歩四七 Ⅲ RIA

吉田伍長

今の井上大隊長殿が当時の中隊長として居  
 られました  
 杭州湾で上陸してから 水や飲物にあたつ  
 たのか 中隊は崑山でコレラ患者を二名出  
 しました  
 師團は南京追撃戦に移ると言ふのに 私達は  
 後に残され 一同地團駐ふんでくやしかりま  
 した 仕方なく行軍序列から離れて 屑所  
 の羊の様な行軍を続けてみると 松江迄行く  
 途中で亦も三四名のコレラ患者が発生しま  
 した 患者が道路を下りてクリーフのそば  
 に斃れて動きません 近寄ると傳染するか

ら行くなと注意されます。衛生隊も却、来  
ません。死んで行くのを泣いて見守るはか  
りです。

その時は死んど全部の兵隊は下痢をして居  
ました。騎隊長殿なんかは、ひどく心配さ  
れまして、湯は沸騰させたか、飯はよく煮  
た、せたかとか、心かけて下さるのですが  
やはり次々と発生します。

この患者を松江の野戦病院に運ぶんですが  
「おい、水を飲ましてくれ」とせかむ。絶  
対に飲ませられぬと言はれておるので  
「水は無い」と申しますと

「水筒の栓でもい、からねぶらしてくれ  
とほし加わりです。耐えな者のつらさ

正に断腸の思ひです。はては

「死んでもいい、水を一口……」

とシク／＼泣く戦友を擲いで幾度も暗い

夜道を病院へ通ひました。

松江では中隊命令で便所を造り、徹底的に  
消毒し、風呂もフレイブル湯といふ工合で  
漸くくひ止め、やつとこのことで南東戦、間  
にあひました。

### 柳港鎮附近の回顧

歩四七 五中隊座談會

上野軍曹

柳港鎮で露営した時です

二中隊の尾平軍曹が

「折角の露営だ、足でも洗つて、ゆつくり休ま  
い」と言ひますので、月夜をたよりに、河の縁に

行き、竹で簀簀を作つてあるところまで行って

洗ひはじめたのは、思ひつきでしたが、何を

頓馬な事をしたものの、尾平の奴足を踏み  
亡らして水の中に落ち込みました  
やうくにして引きあげると、奴さんペソ  
をかいて、すつかり悲観してクシヤミを  
て穿がつておます。早速薪を集めて服  
乾し方です

私は晚飯を食べてゴロリと寝ました。夜  
中の二時か三時頃でもありませうか、妙に  
胸の辺が暑かったです。しばらくは我慢して  
おましたが堪りません。おむたい眼を明け  
てみますと、何と何時の間にか飛火したのか  
殿が焼けて居ます。すつかり慌て、しまつ  
て消し方です

もう眼がさえておむれませんが、重い眼をし  
て服を乾して居る尾平と火を中にして  
、俺とお前は水火の難があつた。こりや戦  
死の前兆ぢやし  
と始は冗談のつもりで話して居たのですが

だんく、不安になり、翌朝は飯が喉を通り  
ませんでした。あんな冗談は決して言ふ  
のぢやありません

### 渡良上等兵

その時分の話ですが、戦死したと思ひ  
上司に報告もされ、遺留品も整理された  
山本、今村、カ、爾一等兵が一週間目にヒョッコ  
り帰つて来て嬉し涙に咽びつゝ、話つた話  
です

天文台への夜行軍の時です。一寸した小休止  
の時眠つてしまひ、ハツと気付いた時は友  
軍が一人も居りません。すつかりうろたへて  
走らやうにして行つたところが、何と敵の中  
萬事休す。二人で刺し違へて死なうかと思  
つたさうですが、死ぬ迄頑張りうとお互に  
勵しあひ、さて引返さうとしたら、敵の歩  
哨に誰何、射撃されたので、走り抜けたさ

うです。さあ北からが大変。畜は廢屋の天  
井裏や。烟の藁の中に隠れ。夜は先づ食物  
を物色して。友軍の砲声の聞える方に歩き  
飢渴に襲はれながら。六日目の晩、誰か  
と日本語で誰何された時は。腰がへたくど  
なつて唯もう淡だつたさうです。  
聞けばそこは十三師隊の三大隊ださうで  
其の晩はそこの中隊長の御飯を分け與へら  
れ。色々心配して休ませていたが、翌日  
中隊まで届けていたといふのです。

### 硫水軍曹

自分も其に似た話があります。柳港鎮に着  
いた時です。広本軍曹が懐中電燈を灯しつ  
つ、硫水々々とやつてきます。何か  
と言ひ、見れば手にソーセルを持って居  
ます。そして「微聲に行かう」と言ふので  
す。跟いて行き、何事かこれと言ふもわか

なく。二人で談笑しながら啼つて見ますと  
部隊が居ません。心臓の鼓動も一瞬止つた  
様で青くなりました。見ると銃も装具も無  
いのです。附近に散乱してゐる藁の如くみ  
からまたさう遠くは行つて居ないかと判断し  
二人で走つてやつと追及。まっぴ御目  
玉を頂戴しましたが。一時は全く途方に暮  
れました。

### 工藤上等兵

南京は支那の首府だから。並大抵ぢやな  
いと思ひました。南京城頭の露と消えれば  
武人の本懐とそんなことを考へてみました。  
塘沽補充は初陣だから。どうしても行くと  
皆頑張りました。南京陥落まで死なりよかし  
なんと言ひ喰まで出来。かつこを引く者は  
あつても。落在する者はありませんでした。



南京に向ふ一日



歩四七一ニ

歩兵五營兵 加藤光男

寒さの爲に目が醒める 未だ夜明けには闇が  
がある様です

藁の温みに去り難い 未練を残して 早速朝  
食 晝食の準備です 各人夫々手配して水を  
汲む者 米をとぐ者 火を焚く者と仕事は  
迅速に処理されて行きます

湯気の上も朝食を終ると間もなく整列の命  
が下りました まだ明けきらぬ空に黙々と  
輝く星を仰ぎながら やがて長蛇のやうな  
隊列を以て 今日行軍が始まりました  
轍の音もとくと聞の中ら響いて来ま  
す 遠くで馬の嘶きもします

夜の帳も次第に薄れ 遙かに朝陽の彼方に  
日輪が燃えるやうに上るのが見え始め頃  
になると 今迄魚言のまゝ動いてゐた兵士  
等の口から 高らかな笑ひ声が始ま  
りました

煙草を喫ふ者 雑談を交す者 今迄しつま  
り返つてゐたあたりには 雑然とした夜明けの  
光景が描き出されました 山野谷川と移り  
渡り大自然の情景に見入り 戦友と語り  
ながら行軍しました

やがて第一回の休憩の聲に 長蛇のやうな  
行列がハタと止り 其所被所に煙草の煙が  
濛々と上りはじめました  
先頭の方が動き出しました 僅かな歩幅な  
から やがては一公里ニ公里と踏破 規程  
の時間ともなれば 休憩です  
一回二回三回と休憩も度宜なれば 太陽は  
何時しか直上にあります

もう晝食まで間がながいと思ふと 急に樂し  
みと元氣が出て来ます

日は既に中天 晝食です 前の方の部隊長

殿も馬から下りて丘の方に歩かれます 私

達も思ひくゝの場所を選んで樂しみの晝食を

とります 汗ばんだ額に快い風が吹いて来

ます、もう秋も半ば過ぎたな」と思ふと

軽い追憶に誘はれます

出発です 一時間の大休止にすつかり元氣

を盛り返して 又雑談に花が咲きました

午後の陽は多少暑く 既に汗ばんで来ます

時間の経つにつれて 背囊の負ひ草が肩

に喰ひ込んで来ます 時々頭を下げて背囊

をゆすぶり上げる 陽は未だ高い フト氣

付いて戦友を見れば 戦友もたゞ黙々とし

て歩いてゐるばかりです

今日は何処で宿營かな あの森の向小に

見える部落かな だがあの迄は大分あるな

背囊は益々重くなり来ます 今頃迄機械的

に歩いてゐるばかりです 先刻見えた部落

もすぐそこに見えますが家がありません

「駄目のない

大分疲勞して来ました 足どりも大分鈍く

なつて来たやうです 皆も疲れたのでせう

誰一人無駄口を叩く者がありません

丘が見えます 其の向ふに望樓が見えはじ

まりました 愈々町も近々やうです

先頭が止りました 列頭今日の行軍も終つ

たのです 心の弛みか 疲れが出て来ます

でも夕食や寝床の準備をしなければなり

ません 飯を炊く者 夜具代りの藁を取り

に行く者と夫々分擔して 今迄の疲れも忘れ

て立働きました

やかて温い飯に腹を満して 生々とした氣

持で ローソクの火のユラユラと動く中で

雑談を交しました 何時の間にか藁の中か

一 晝の疲れの爲か安らかな親友の寢息が  
聞えぬめました 儼しい故郷の夢でも見て  
ぬるのでせう

ひるがかり友の熱口やつかれ顔

黙々と歩む闇夜や故郷思ふ

牛殺し集まれと呼ぶ鬨軍曹



### 嘉善の想出

歩四七、五、一ニ

藤川軍曹

嘉善に到着する一里程手前のことですが  
一寸大きな川があり、橋が破壊されて居ま  
した。どうにか乗れる民舟が一つ、それを  
先着の十八師團の野砲が一門づつ、渡して居  
るところです。砲と一緒で、から歩兵を渡  
してくれんだらうかと頼みますと、二べもな

く断られ、雲降る嘉善の夕、道は泥濘を極  
めておます。靴は半張りがとれてない。寒  
風に行きくれて、靴下を代えやると致しま  
す。股のける所がありません。足踏  
みをして暖をとるんですが、それが何  
時しか早駈けとなり、大隊長殿に  
「前進したらいかん」と  
叱られました。十一時頃迄さうして居ま  
した。今考へればよく頑張ったものと自  
慢したくなります。

### 徴發は危険

歩四七、五、一ニ

庄部上等兵

嘉善に警備の時、物資徴發を命ぜられまし  
た。私は五六名の親友と舟に乗り、一里位

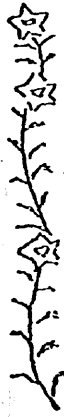
の処に微聲に行つた晴のことです

平島上等兵は銃を構つて来ませんでしたので、舟の中に監視に残しました

鶏とか卵とか久し振りの品物の豊富さに何時しかバウ／＼になり、時計を見て、慌て、帰りのけすすと、土民らしい奴等が三十名ばかりで平島を取囲んでゐます

平島は帯剣一つで、可哀さうに抵抗も出来ないのでせう。折角の集めて来た品物もその場に放り出し、かけつけて見ました

平島は（督戦隊）と書いた腕章をはめた奴の腕をへし折り、剣を引抜いて暴れ廻つておました。漸く駆けつけ、床尾板で撲りつけ、半殺しの様にしてやり、危い所を助かつて帰りましたが、微聲の隠しさをつくづく感じました



喜加善

### 一週間の焦慮

歩四七、五二

長野 翔春

我が長谷川部隊は、崑山を出発して大雨の中を瀧鼠のやうになり乍ら四日間の行軍で嘉善に着きました

不幸にして賄隊はコレラ発生のため、行動停止の命令を受け、防疫に努むることになりました

先に中隊長殿は

「吾々は名譽ある敵首都南京攻襲の先鋒に浴するところ、なつた、諸士と共に喜びに堪えないし

と訓示されました

然るにコレラに犯され其の防疫の爲に行動  
停止とは 忍び難い恥辱であります 已に  
第十軍下の各部隊は南京へ南京へと進軍の  
途にあります 吾々のこの嘉善に残され  
ることは 如何にも残念な事です

鼓呼の聲に送られ 郷土銃後の希望と期待  
を一身に負ふ吾々として コレラの爲に  
南京攻取の間に合はるせんでしたと どの  
面を上げてお詫びが出来ませう

これでは折角の今迄の苦勞も水泡に帰して  
しまひますし 各人の不注意の爲に 將隊  
の名誉を傷つける様なことがあつてはなら  
ぬと お互に勵まし合つて 充分防疫に努  
力いたしました

かうした努力が遂に報ひられました 一週間  
の防疫実施の間 中隊からは勿論 將隊か  
らも発病患者一名もなく

愈、十一月二十九日出発

南京へ急進することになりました その日  
は突に気持のよい好天気でした 吾々の心  
持も日本晴 一週間の休養で元氣は満ちみ  
ちて居ります 然し一週間も前に先発して  
居る師團に追及することは却りの難事だ  
です

道は永い間の雨でかなり悪い その上嘉善  
から南京迄約百里あります 一日に十里行  
軍しても十日の日数がかかる

南京攻取には果して間にあふだらうかが又  
問題でした 急行軍第一日目に足を痛め  
マメをふみだしました 二日目 三日目も  
痛む 四日目五日目 足のマメは固まつて  
もう感覚はあつません 足の調子は反つ  
てよくなりました

連日南京へ〜と休憩の時間も抜きにして  
急行軍が続きました 後四十里 後三十里  
と頑張ります

その頃でした。上海軍は既に南京城四野に迫つたと言ふ情報を聞き、吾々は南京攻塵に間に合はぬと落膽させられました。

師團の前衛は南京城八里の地境まで迫つてのちとも聞きませんでした。可笑しな話でありませうか。敵兵も、吾等が着くまで南京城で頑張つてくれ、と愛な祈りを捧げつゝ、歩度をぐんぐん伸ばします。まるで駆け足です。

それでも一人も落伍する者はありません。軍旗と聯隊本部はトラツクで先行しました。間に合ふか、間に合はぬか、愈々最後の頑張りです。

毒薬を出発して十二日目の十二月十日には、四辺に敵、たる砲声を聞き乍ら、第一線に追及、四顆松といふ山の中で薬を被つて一夜を明すことになりました。

砲弾は側面に同断なく落下します。池に落ちた砲弾は、丈餘の水煙をバツト上

げて、雲に絡纏です。然し焼跡の民家にはもう五六名の負傷者が収容されました。南京攻塵に間に合つて、苦勞し加ひがらうたといふ者びと共に、こゝでやらぬでは死にさしぬといふ気が起りました。然し明日の攻塵を續しみつゝ、十二月四日、連続行軍の勞れにこの砲弾下に何時か深い眠りには入りました。

# 最後の頑張り

歩四七頁ノ一

歩兵少尉 倉迫俊男

十二月七日午前七時、濠城館を出発。師團主力は既に南京城壁近くに迫つて、今一息と言ふところだと聞きました。

嗚呼、杭州湾頭に荒波を蹴たて、上陸以来

敵首領一蒼衆りこそ 我等百中支活羅諸部

隊の希望のゆであり 又これあるがために

こそ一日十数回の強行軍も 苦痛に耐へ切れ

ない足のマメの痛みも 齒を噛みしめながら

躍気となつてゐるのであります

足の上に血が出来るほどの感覚も何もない

たゞ機械人形のやうに 右脚の次に左脚と

交互に動かしてゐるだけです

どうして之が諦められませう 銃獲の國民

にどの面を上げて

「南京城攻め破るにはコシウ患者養生のため

他隊に廻れて参加出来ませんでしたし

と言はれませう

中隊幹部は 悲憤慷慨する兵をなだめるか

に並、自らも苦勞を致しました

南京城よ 支那軍よ 我が聯隊が到着す

るまで ひとつと（頑張れよ）と皆口に

こそ出さなうが 心に念じてヒタ走りに進

みました

十月八日 幸にも晴天続きです 使脚を以

て誇る聯隊の兵は 靴を裂いて 疾風のや

うに一日十五里余を突破しました

休憩時間も切り詰め 鉄塊が肩の肉に噛みつ

くやうになつてゐるが そんなことを氣に

してゐる者は一人もない

首藤中隊長殿が足の痛みを軍歌に紛らし

無理に大きく前後に腕を打ぶつて 元氣を

出して居られるのは 見ながらにお氣の毒

に思へませんでした

川取られた水田の稻株に 真白い花が咲い

たやうに氷柱が立つてゐます 家鴨がア

がア無俗好に尻尾を振りながら 泥鰌を

漁つてゐます

かうした情景も 早寝れ切つた吾々には何

の感興もあたへない 只黙々と南京街道を

何處までか どこまでも 歩き続けるばかりでした  
十二月九日

今日まで 未だ南京が陥落したと言ふニュースを聞かない

「我々も南京城攻陥戦に間に合ひさうだ」といふ感じが 艦兵の胸に一樣に湧び上つて来ました

かうなると足の運びは昨日よりも軽く 兵は冗談を言ひ合ひ 隊伍には笑聲がへ聞えはじまりました

今日の行軍はなんとなく愉快です

長谷川聯隊長殿も 今日とは思ひなしか愉快さうに馬上に鞍を仰し 鞭を擧げて 遙か南京城の方向を指しながら 都甲中尉殿と談笑して居られます

総ての人々が愉快さうに生々として見えます

この日聯隊本部は軍旗を奉じて 自動車で

先行し 第十中隊 第十一中隊も乗車して先登りましたが 中隊は取り残されてガツカリしました

然し戦線は固く 銃砲声は耳を聳し 飛行機の爆音又しきりです 一同は勇みの勇んで主力のあとを追ひました



歩四七五、五

佐木守

ふるさとに

るすを守れる

父上の

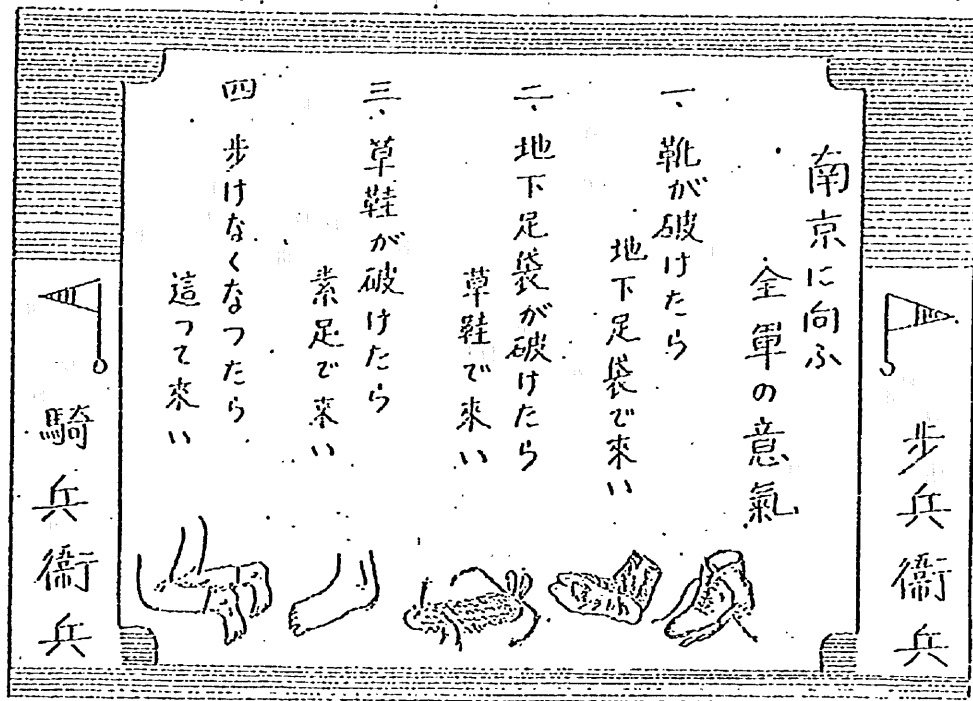
便りはいつも

恥を知れよと

.0433

421





# 南京への急行軍

歩兵衛兵座談會

## ◇入口軍曹

連日の泥濘と急行軍に誰もの軍靴も破れておました

しかし軍靴の補給はつかない。それで次の様な意味の達示がありました。勿論正確ではありませんが、全軍の士氣如何に旺盛且つ悲壯なものであつたかを、愧ぶことが出来ませう

- 一、靴が破れたら地下足袋を履け
- 二、地下足袋が破れたら草鞋を履け
- 三、草鞋が作れない者は徹夜して履け
- 四、草鞋が履けない者は素足で歩け
- 五、歩けない者は膝で這つて来い

こんな意氣込井が南京へ急行し  
た 徴発した草鞋を澤山 隊長殿の馬の尻  
に括り付けたあの恰好は 今思ひ出しても  
おかしくなりす

### ◇井 軍曹日

田山上等兵が大きな豆をこきえて跛行し見  
るからに可哀想でした

「田山歩けるか  
と言ふと

「田山には大和魂がありますし  
と意氣を示しましたが 涙がましい程でし  
た

### ◇丸岡 軍曹日

工藤一等兵なんか自分の腕時計が落ちたの  
を知って居ながら それを拾ふとせず進む  
のです 精根盡き果て唯魂のみが南京へ南

京へと急ぐのでした

### ◇山本 軍曹日

当時弾薬も缺乏して 各部隊共自殺用の  
弾薬あるのみ 皆肉弾で敵に当れと悲  
壯な命令が出た程でした

### ◇井 軍曹日

十一月三十日 南潯鎮西方の小部落を出発  
に際して 集合時間 集合地道路上の命が  
あり 私自分隊員六名を連れ三十米位離  
れた道路上に 指定の時間より十分早く着  
きました

すると大行軍の兵隊や 又將校方もどんど  
ん前進しておます 騎兵も行く者もあり止  
つて居る者もあると去ふ状態です 未だ  
高級副官殿が見えないので「おかしい」と  
思ひ下ら 進む將校方に引れ形で歩いてお

ましたもの、百歩も行つた頃

「師團司令部は其場に停止して居れ」

の聲にその儘立つてゐました 三十分程し

てから残つた組が會原大尉殿を先頭に隊伍

を整へてやつて來ます そして自分の前ま

で來て大尉殿は

「井 お前は引こんで居らんか 高級副官

殿から叱られるや えらい怒つてゐるか

ら」

森口準曹 獣匠部の將校の人 等々 みんな

なが口々に

「井 かぐれて居れ」

「叩かれるぞ」

と多みます 道は田中の一本道です 別に

悪いことはしてゐない そう思つてゐなが

らも私は内心悪々としてゐました

高級副官殿は追付かゝる 成程苦虫をかみ

つぶした様な顔をして居られます 私の前

に馬を停められ

「井 お前は誰の命令でこゝまで來たか」

愈々來たかと思ひました

「命令ではありませんが 將校の方も進ん

で居られるので こゝまで來てしまひま

した」

「司令部の者は皆お前が引張つて來たのだ

らう」

「いゝえ」

「お前の様な奴は伍長の値打がない お前達

は内地の方に行け 你的様な奴は要んよ」

とびしやりと鞭で叩かれました

痛くはなかつたけれど 皆の面前で面目

ありませんでした 一丁一丁仕方なく最後か

ら悄然とついで行きました

後で聞いたのですが あの時は集合状態が

悪かつた為め 會原大尉殿を始め將校方

もきつく吐られたそうで 結局自分が最後

に一人で引受けたのです

「くよくよするな」

と勸まされ、南京へ南京へと進みました

### ◇ 井（正人）軍曹

十二月十三日歩兵祠堂のことです 河南

台に在る先遣隊三十六旅團の情報蒐集の爲め 藤原参謀の命で岩下曹長の護衛として

丸岡 木下軍曹と全部で五名乗用車に乗つて夕方出発しました

三四里行つてから

「こ水から愈々危険地帯だから用心しやう」と銃も装填し、警戒して進みました

皆黙つて緊張しておます 夜の山道には不

気味な程サーチライトが輝きて 今にも敵兵が現はれそうな林の中など進んば行きま

した

十一時頃前方に此方に銃を向けた歩哨が二

名立つてゐます

「敵だー」

そう思つてルーフライトを消してヘッドラ

イトのみとし 徐行して近づいて見ますが

まだはつきり判りません

「誰か オイ」

と言つて下りて見ますと 友軍、持務兵の

歩哨で淮尉一人兵二名居ります

淮尉が言はれるには

「危いと二つでした 誰何を三回もしました

たが返事は無いし、これは敵が逃げると

ころだと思ひこんで、虫とくと命令し

既に機関銃の引鐵に手をかけておる 間

一髪のところだつたのです」

と聞いておつとしましたか、エンジン音が

で誰何が聞えなかつたのです

途中二三回友軍の歩哨を通過し 互ひに驚

き驚きあつ、進みました

或歩哨のところで將校が居て

「これから一里位いれかかないから降りて行  
け 敵が多いので危いぞ」

と町囀に道順を教へてくれました

私共は銃をしつかり握り極めて緊張して夜

の一時頃着きました 途中成程無氣味で二

三発射された位だったので 彼の將校が

居なくて自動車で行つたら 或はやらぬて

おたかも分りませんでした

使命を果して引返したのは朝の五時でした

が 其の間と言ふものは勿論一臆もしてゐ

ない 始終最高度の緊張してゐました

# 南京へ向ふ

騎兵衛兵 座談會



◇村上悟 伍長

百十四師團と六師團が 南京城一番乗りを

目指して先を争つてゐる時でした

東善鎮の橋の上を兩師團の車輛部隊が三

列になり道一杯になつて行軍してゐました

「傳令だ 通してくれ」

と言ふが百十四師團の方が通してくれませ

ん 鬚目慢の板井上等兵が

「鬚に物を言はしてやる」

とばかり談判に乗り出しました ところが

百十四の方の鬚特務兵の方もなかく強情

にさかぬ 板井がとうく怒り出して 軍

刀を引こぬき

「なんだ鬚 その鬚を削つてからものを

言へ」

鬚と鬚との喧嘩です それに六師團の歩兵

の落伍者なども應援する やつと追越すこ

とが出来ました 後で

「貴様 自分が鬚のくせに百十四の奴に

ヒゲくと言ふ奴があるか」

と言ひますと

「いや向ふが俺の鬚よりおかしかつたぞ」

と大笑ひでした

### ◇ 兒玉備三 伍長

南京攻畧戦の十二月十二日正午頃中野副官

殿以下七名 三十六旅團に連絡と行候と兼

ねて 東善鎮を出発したのが晝近くでした

本道に出て五百米ばかり行きますと 何師

團かの騎兵が凹地に纏馬してゐました

私達が其處を通り抜けようとする

「こゝから先は危険ですよ とても弾が來

て行けません」

と注意しましたが

「行けぬことがあるものが」

と百米ばかり行くと 右の高い山から射撃

を受けますので

「これはいかん」

と五十米ばかり後に引返へして下馬しました。そして中野副官、尾形、板井、城山、私まで五百徒歩にて二百米ばかり行きます。と、又右の山から盛んに射撃を受けますので、私もチエツコを射たうとするが弾がどろしてもこまらない。「尾形、弾が入らぬぞ」と言ふと、「なんだ、それは逆ぢやないか」と言ふ風で慌て、しもつておました。その折物音に驚いてすぐ目の前から、維子が二三羽ははたきしてはげしく飛び立ちましたのでびつくりしました。そこからの沼田の中に入って各個躍進して行きました。その時板井上等兵が弾が来ればごろつと轉ぶ。「しまった、やられたか」と思ふと起き上つて又前進すると言ふ具合で、死んだ真似をしながら進みましたが、倒れる度にこんど

ほんとにやられたかと心配しました。私はチエツコを済ませていたので、喉が渴いて仕方がない。「副官殺、クリークの水を飲まして下さい」と願つても、「お前が一人飲めば皆が飲みたがるから飲んではいけません」と吐かれるので仕方なく前進しておました。尾形が、「兒玉、交代するぞ」とチエツコを取つてくれましたので、どうやら部落まで着きました。部落に着きますと家の前の一本木に、敵の駄馬をつないでありましたので、「敵はまだこのへんに居るぞ」と言ひながら、其處の家に四五名の媳婦がいたので、お茶を持って来させて飲んでおきました。

その時板井上等兵が小使じようと思つて  
家の左角に廻つて小便してゐた時 家の中  
央から裏の方に小銃を持つた二名の敵兵が  
あらはれしました

「敵だッ」

と言ひますので

「どこに居るか」

と言つて安全装置を解いて 射たうとする  
うちに裏の家の中に逃げこんで しまひま  
した 小銃を捨て、逃げて行きましたので  
板井上等兵が持つて来て副官殿に上げると  
「これはいい、土産だ 俺が一つ持つて行こ  
う」

と言つて副官殿がとられました

「これからもう行けぬが おもむも敵が澤  
山居るぞはややくして居ると捕虜になる  
早く歸らう 誰か早く前の高い山に昇つ  
て監視して居れ」

と言はれられけれども中食もして居りません  
ので 走る元氣はありませんでした  
馬の位置に引返しておすと 左の山が  
ウチエツコを持つた敵兵と小銃を持つたの  
が私達に

「你 来ッ」

とやつてくる 副官殿は 「早く馬の處へ  
歸れ」 と言はれるので 急いで手馬の位  
置に歸つて見ると 森山池田が 俺達はど  
うやらやられたらう と思つたこれぞ安心  
したッ と喜こんでくりました  
本隊に歸つた時は午後三時頃でした

### ◇丸山島夫上等兵

南京入城一日前だったと思ひます お票に  
なるものがなくて捜してみましたが 何も  
ない

酒好の富田憲兵少尉（当時准尉）殿が居ら



れましたので

「進尉殿 チヤン酒がありましたし、

と持つて来ると

「うん をれはテンホーぢやないか チヤ

ン酒のうちでも上等のラオチユがマ

れに香があつたらなあ

と喜こび且つ歎息をします

「そこに豚の塩つけ見たいな物がありました

たし」と喜ふと

「持つて来てみいし」と言はれるので取

け持つて来ると

「これはハムぢやないか ユウシウがマ

と大喜こびです 一切出 切りとつて見ら

と 紅白の縞のあるとてもきれいなもので

した

十二本位は集めてわたら 大毎記者がき

ついで

「一本二十円に賣つてくれし

とわだりましたか

「そんないいものなら ヲれんくしと

とうノ、燕湖まで持つて行きました

### 感激の司令部

歩兵衛兵 吉本中尉

当時第一線は城壁道くに殺到しつ、攻取し

ておました 師團司令部は十二月十二日午

前七時三十分 西善橋を出発して雨花台の

手前 城壁から二千程離れた高地に十一時

頃到着しました

護衛兵はMG一個分隊小銃一個分隊です

師團長閣下は 南京陥落の快報を待つて居

られます

中山門の方へ上海軍がどんく進んでゐる

ぐっくしてゐるとそれに一番乗を取られ

る 南京城は是非我が六師團の手に……  
皆そう思つて今かくと快報を待つてゐま  
した

うなる城壁爆破の野砲の集中射撃を 眼鏡  
でじつと見て居られる閣下の顔も緊張して  
見えます

引締つた閣下の口元が微かに緩びました  
「突撃路が出来たか」

「おう 決死隊が登つて行く」

眼鏡を覗くと歩兵隊の登つて行くのが 手  
に取る様に分ります

あつ 一名 二名と驚かされる

私共は成功を祈りました

「そろそろ一息だ もうすぐだ……」  
と熱心に見て居りますと 十二時三十分頃

電話

「歩兵第四十七聯隊緒方大隊は十二時二十  
分 城壁を占領せり」

それに引續いて

「歩兵第三十三聯隊は 西南角城壁を占領  
せり」

おう 遂に来た 待望の快報が……

谷閣下を始め 参謀長殿 外一同 感激の  
万歳を三唱しました

見よ 眼鏡に映る城壁に緋へる日章旗を

「シマンベンはないか」  
閣下の声は喜ぶに顔へておました

曾原大尉殿の持つて居られました ウイス

キで 軍参謀 幕僚 新聞記者と共に乾  
杯しました

誰の顔もあめるときばかりは流石に喜色満面  
でした

そして意氣揚々と歩調も軽く 雨花台へ前  
進しました

x x x

奉祝  
記念記

紀元二千六百年



轉戰實話

北支篇 上卷

限定 壹百貳拾部中

第 號

昭和十五年十一月三日

於中支

町尻部隊本部  
戰史編纂班

432

0444